

キリスト教

海津 淳

はじめに

桜美林大学は、日本基督教団牧師、清水安三によって創設された中国北京の崇貞学園にその起源を持つ。しかし第二次世界大戦敗戦を機に清水は帰国、旅装を解く間もなく東京町田の地に桜美林学園を開学した。1946年のことである。

それから半世紀余、今日の多様化する大学群の中、「キリスト教入門」という初年次必修科目、さらにその理解深化のための「キリスト教理解科目」群を設置していることが、桜美林大学のひとつの大きな特徴であろう。

1. 「キリスト教入門」

桜美林大学が設置する初年次のためのキリスト教関連科目は、大きく二つに分けられる。

ひとつは「キリスト教入門」、もうひとつは「聖書」「キリスト教と社会」「キリスト教と芸術」「キリスト教と他宗教」からなる「キリスト教理解科目」でありそれぞれが2単位、前者はコア科目として全学必修、後者は基盤教育院科目でありリベラルアーツ学群の選択必修科目となっている。

まず「キリスト教入門」は、「英語コア」「文章表現」「口語表現」「コンピュータリテラシー」「日本語専門基礎」(留学生)とともに全学必修のコア科目として位置づけられている。必修科目であるために、現在は専任教員4名非常勤教員1名の計5名が、共通のシラバスに従ってこの科目を講義しており、履修は学群ごとにクラス指定され受講人数は各クラス100人前後である。

この科目が必修科目として設置されるのは、無論、牧師であった創立者がその教育の精神的基盤をキリスト教においており、それがすなわち重要な建学の精神であることに起因する。その「キリスト教入門」という講義の特質・内容に関しては、まず大学講義案内(2012年度版)を引用したい。

「キリスト教入門」講義案内

桜美林大学はキリスト教主義大学であり、その建学の精神はキリスト教にある。この授業では、そのキリスト教について深い理解と広い知識を習得し、「宗教」に対して健全な姿勢を身につけ、同時に、各自の宗教的なセンスを育て、自己の人生観や世界観の確立に役立つ機会としたい。また、世界宗教であるキリスト教は、ユダヤ教、イスラム教との関係も極めて深く、現代世界を理解する上でも欠かせない宗教である。キリスト教の学びを通じて世界の文化や歴史、更には政治、経済を読みとる洞察力を育てたい。

(2012年度大学講義案内より引用)

ここに示されるように、本学におけるコア科目としてのキリスト教の履修は、これに関する広い知識と深い理解により自らの人格形成の指針とするとともに、「宗教」に関する適切な理解、世界情勢理解に不可欠な宗教理解とそれに基づく分析能力の修得までを射程に収めるものである。従って共通シラバスに基づく学習項目として、桜美林学園とキリスト教、旧・新約聖書理解、キリスト教史、現代社会とキリスト教の関わりといった基本的主題を提示し、これらに基づいて週1時間（1コマ）半年間のあいだキリスト教の基本的知識を習得していく。

なお、このように授業においては客観的知識を講義することに比重をおくために、時間外に行われる「チャペルアワー」（プロテスタント礼拝形式）への出席も併せて奨励している。

2. 「キリスト教理解科目」

先述のように全学学生はコア科目としての「キリスト教入門」において、その基礎的知識を習得する。そうした理解をさらに深化させ、あるいは各学生の個別の学問的関心に対応するべく設置されているのが「キリスト教理解科目」群であり、特にリベラルアーツ学群の選択必修科目となっている。

ここでは「聖書」「キリスト教と社会」「キリスト教と芸術」「キリスト教と他宗教」の諸講義を、専任教員、非常勤教員併せ複数が担当しており、その数は「聖書」3クラス、「キリスト教と社会」5クラス、「キリスト教と芸術」3クラス、「キリスト教と他宗教」2クラス、計13クラスである（2012年度）。コア科目「キリスト教入門」との大きな相違は、すべての講義は同一名称であっても、その講義内容は各担当者によって異なる点である。

基礎知識の把握としての前者では、すでに述べたように共通シラバスによって講義項目を統一しているが、「キリスト教理解科目」では、特に学生の知的関心の多様さに対応する理由からも各担当者の専門を生かしたより焦点を絞った主題に基づき講義を展開している。

その例として「聖書」の講義に関して各クラスの講義内容を、2012年度講義案内の引用、および授業シラバスに基づく簡略な概要として記述する。

「聖書」講義案内

聖書は「隠れたベストセラー」と云われ、世界中で最も多く読まれている書物です。2004年には約4億冊の聖書が人々の手に渡りました。翻訳されている言語は2377語にも及びます。ですから、聖書の知識は、キリスト教理解に止まらず、現代社会を正しく読みとる有効な道具でもあります。そして、聖書は特定の宗教を信じる人のための「閉じられた書物」ではなく、全ての人に「開かれた書物」です。聖書の世界を探求するたびに加わり、自分自身を見つめる心の作業も学生時代には重要なことです。

(2012年度大学講義案内より引用)

「聖書」各講義の講義内容概略

1. 聖書 (a)

講義内容：旧・新約聖書の世界、その信仰/旧約聖書抜粋/神の創造と地球/預言の本質/福音書、使徒言行録等、/外典・偽典 等

到達目標：キリスト教の正典、聖書についての基本的知識習得/その基本的思想の教養としての修得/さらなる学習の契機とする

2. 聖書 (b)

講義内容：聖書の基礎知識/イエスの登場/イエスの伝道活動/イエスの奇跡/イエスのユダヤ教律法主義批判/最後の晩餐 等

到達目標：キリスト教の正典、聖書についての基本的知識習得/イエス・キリストに関する知識の習得/キリスト教と他宗教の相違の把握/キリスト教美術の基本的傾向把握

3. 聖書 (c)

講義内容：聖書をめぐる誤解/聖書とキリスト教の関係/聖書の作者はだれか/真実と事実の違い-聖書と科学/イエスの問いかけ 等

到達目標：文学としての性格を持つ聖書の読み方を修得し、聖書における真実と事実の意味の相違を理解する

(以上 2012年度授業シラバスに基づく概略)

上記に見るように同じ「聖書」という主題においても、それぞれの授業が異なる視点、問題意識等から構成されていることが理解できよう。

その他「キリスト教と社会」などさらにより現代的性格を想起させる科目を例に挙げれば、それぞれのクラスには、引用の講義案内に見る原則に基づきつつ以下のような内容が提示されている。

「キリスト教と社会」講義案内

キリスト教は社会活動を重視する宗教です。人権擁護、性・人種差別撤廃、環境保護、教育の普及福祉施設の設立等にむけ、先駆者として活躍してきたのはキリスト者たちでした。現代を生きる私たちにも同様の問題を抱えています。ですから、彼らの精神を受け継いで、今、山積している社会の諸状況を考えていかねばなりません。この講義では、こうした問題にキリスト教思想の立場から検討を加えながら、21世紀の私たちがいかなる社会を築いていくべきか、その道を模索していきたいと思います。

(2012 年度大学講義案内より引用)

「キリスト教と社会」各講義の概要

- 聖書に基づきつつ「信仰・希望・愛」「生命への畏敬・尊厳」を学び、世界宗教としてキリスト教を理解し、グローバルな現代社会に生かす知識を学ぶ。
- 社会における貧困・差別・暴力等の問題を克服すべき課題として活動している、キリスト教人権運動や平和運動を学ぶ。テーマに多文化共生、戦争など。
- 生命の尊厳、職業、正義・平和・人権、福祉等をテーマにとり、聖書の人間理解、キリスト教倫理の基本を学び、自分の進むべき道への手がかりとする。
- 現代社会の抱える問題に対するキリスト教の考えについて、信教の自由、死刑問題、差別などをテーマにとり、ドイツのキリスト教会の考え方を導きとしつつ学ぶ。
- 人間・愛・自然というテーマからキリスト教倫理の基本精神、近代社会の民主主義・資本主義、ハンセン病・奴隷問題など社会問題を論理的に検討しつつ、自らの問題として考えてゆく。

(以上 2012 年度授業シラバスに基く概略)

以上の他、先述の「キリスト教と芸術」「キリスト教と他宗教」の各科目が、全体の統一主題に依拠しつつも、担当者の個別の視点から「キリスト教理解科目」においてさらにキリスト教の知識や問題検討を深めていくことを目指し開設されている。

3. 「キリスト教関連科目」の意義、課題と展望

このように、桜美林大学では建学の精神であるキリスト教の理解、さらには個人の人格形成・指針の獲得および現代社会・国際社会の理解の手段として「キリスト教理解科目」を、基本的に初年次対象として設置している。

こうした領域の講義の実際問題としては、学期末の学生による授業評価アンケート記述などにおいて必修科目化に対する疑問視の意見が散見され、そうした傾向は特に授業開始時期の学生の対応に少なからず見られるものである。必修科目共通の問題ともいえようが、とりわけこの分野に関しては、“キリスト教”すなわち“宗教”に対する日本社会特有の視点がそれを突出させている。“宗教”に対する疑い、嫌悪はことに現代の日本社会に顕著な風潮であるが、それであるからこそ、こうした機会に真正面からその“宗教”のひとつであるキリスト教を学ぶ機会を得ることは決して無意味ではなからう。むしろ、宗教に対する偏見や誤解を正し適正な判断力を育む良い機会となり得る。本来はキリスト教主義大学であることがこうした科目を設置する一義的理由であるが、現代社会においては、日本にあって看過されがちな“宗教”に対する適正な知識を習得するという点においても、その意義は決して小さくないということができよう。さらに、講義案内にも記載されているとおり、国際理解の面でも宗教に対する思考・考察・理解という観点を身につけることは欠くべからざる要素である。

あるいは建学の精神としてのキリスト教の考え方が、学生にとって知識という面のみならず、その生涯において何らかの指針となることはこれを担当する者の深く願うところである。こうした科目を初年次科目として設置することは、やはり私学ならではの大きな特質でありまた意義であるといえよう。

さて、この「キリスト教理解科目」の今後の課題であるが、やはり近年の成果主義、数値的実績評価の潮流に対する自らの姿勢の確立を挙げねばなるまい。成果を第一に求める社会においては、これらの科目は、一見その価値を見出しにくい。しかし、既に学問というものの本来的価値は即時的成果とは必ずしも一致するものではなく、その価値に気付くには相応の年月を要するであろう。それを踏まえつつ、今日的要求いかに対処しゆくか、さらに検討を重ねてゆきたく考えるものである。